傷跡

真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷跡

【Ｎコード】

Ｎ０７７４Ｅ

【作者名】

真琴

【あらすじ】

生まれてすぐに母親に捨てられ、小学校に入学する前に施設に入った由奈。由奈の傷は深い。それと同じように、由奈の友達である香絵の背中には、生々しい傷跡があった。様々なことに悩み苦しんだ由奈が、最後に見たものとは、一体・・・・・・？

第1話　わたしは捨てられた

わたしは捨てられた。

生まれてすぐに。そして二回目は六歳のときに。

過去の出来事は、痛々しい傷跡として今につながっている。

たとえそれが他人には分からなくても、自分には分かる。

自分にしか分からないから、自分ひとりで向き合うしかないのだ。

八年前、わたしは夢を見た。それは決してひどくリアリティなものでも感覚的なものでもなくて。ただ、最後の日に何かを初めて見た、という感じだった。そしてその後の未来を予想させる、意味深く、そして心痛いものだった。

十字型の大きい横断歩道。その中心部分に、もうじき小学生になるわたしは立っていた。特に見向きすることもなく、たくさんの人がわたしのそばを通り過ぎていく。気づいていないのか、気になっていないだけなのか。

わたしは、独りだ。そのとき思った。誰の視界にも入らずに、誰にも見向きされずに生きている。価値を見出せない人生を歩んでいるわたしは、独りだ。そう思った。

その時、肩が触れ合ったわけでもないのに、妙な感触を肩に覚えた。

振り向いた。誰かがそばを通った気がしていた。

「誰？」

その人は立ち止まり、わたしの声に振り向いた。

相変わらず、何百もの人が、横断歩道を渡り歩いている。そんな中、その人はとてもしっかりした輪郭を持っていた。周りの大勢の人を背景にしてしまうくらいの存在感が、その人にはあった。

その人は、女の人だった。髪は長くて、鮮やかな茶色で光っている。鼻筋が通っていて、二重の力強い目がとても印象的だ。見た目若く、二十前半というところだろう。

ただ気になるのが、この人の目つきだ。ただ力強い、というだけではない気がする。なんで、あんたがいるの。まるでそう言うような目で、にらんでくるのだ。それは憎しみや悲しみ、哀れみにさえ思えるくらい強いものだった。

わたしはこの人を知っている。でも、無理に思い出したくはなかった。この人とは深いつながりがある。それが何かはわからないけれど、切ろうとしても切れない、ほどこうとしてもほどけない糸でつながっていると思った。

「話しかけないでくれる？」

わたしの問いに答えるはずもなく、きちんとした、声でその人は言った。聞き間違いでもなんでもなくて、ただ、その人が冷たい声でしっかりと「話しかけないで暮れる？」と言ったのを、わたしはこの耳で聞いた。

その瞬間、すさまじい痛みを感じた。それでもわたしは深く傷ついた。どうしてか、この人にそういうことを言われると心の奥のほうが悲鳴をあげた。

「わたし、あんたなんて知らないから」

わたしもこの人のことは知らなかった。でも、不思議とどうしてか、自分を知らない、と言われたときに寂しさを感じた。

「わたしの人生に、関わらないでほしいの。もう、わたしの目の前に現れないでちょうだい」

女の人の言葉に、鋭くとがった痛みを覚えた。ずっと昔の記憶が奥のほうからよみがえってきて、何か、まるでひどい例えだけど、ゴミを捨てられるみたいに見捨てられたみたいに感じた。

そんなわたしの心も知らず、女の人はそそくさと立ち去ろうとする。このまま女の人を行かせてしまったらもう二度と会えないような気がして、「待って」と呼び止めようとした。

口を大きく開く。お腹の底から声を出す。出そうとはするのだけど、どうしてだか出なかった。喉が、緊張してうまく動いてくれない。何度やっても、弱くかすれた息しか出てくれなかった。

その間も、女の人はどんどんわたしから離れていく。走って追いかけることもできずに、ただ、必死に出ない声で呼び止めていた。

その時、女の人が立ち止まった。わたしは正直ものすごく嬉しかった。両手を広げて、温かく迎えてくれるのかと期待していた。

「あんたなんて、生まれてこなきゃよかったのに」

存在を否定された。

生まれてこなきゃよかったのに、なんて言われたら、わたしはなんていい返したらいいのか分からない。ただ、そこにある胸の痛みを感じずにすむ方法があるのなら、教えてほしいと思った。

わたしは、この女の人からすれば無価値の人間らしい。

頭が真っ白になりながらも、女の人がどんどん先に進んでいくのだけがわかる。少しずつ点のように小さくなっていくその姿が、見ていると心苦しかった。仕舞いには点ですら見えなくなってしまったけど、それでもずっと、わたしは女の人が去っていった方向をながめていた、全身の力が抜けたまま。

全部抜けてからっぽになってしまったような頭と心で考えていたら、何か大切なものを今さっき失ったような気がしてきて、同時にもうそれはわたしにとって、二度と手に入れることのできない、そして手に入れても辛いだけのものに変わりつつあった。

たとえそういう複雑なものだとしても、今までで一番苦しいことは確か。見知らぬ女の人にちょっと言われただけなのに、その一言一言が、普通では考えられないほどの鋭い刃となって、胸に突き刺さった。もう忘れたらいいのに、忘れられない。それが余計に痛みを募らせる。

気がついたら、一筋の涙が溢れて、頬をつたっていた。

しょっぱい味のする涙だった。

あごから滴となって、地面に落ちる。

落ちた瞬間、それは黒い染みとなって小さく広がった。

夢で見た女の人は、お母さんだろうか。わたしが産まれてきたことを言っていたから、そうかもしれない。でも、もしそうだとしたらあの人の年齢とわたしの年齢差があまりにも狭すぎて、おかしなことになってしまう。

考えられたのは、わたしの頭の中では産まれてすぐに見たお母さんのまま、それ以上何も変わってない、ということ。あれから時が流れ、お母さんがどんな顔になっているかなんて、あの頃はもちろんのこと、今でも想像がつかない。

第1話　わたしは捨てられた（後書き）

初めまして、センといいます。

もし僕のほかの小説をすでに読んでくれていた方、お久しぶりです。

読んでよかった、と思える小説にしたいので、
楽しみにしていてください。

もしかしたら、完結できないかもしれませんが・・・。

でも、限界まで挑戦するつもりです。

それまで、応援よろしくおねがいします。

第2話　形見の写真

夢を見た次の日、学校から家に帰ると、出かけるところがあるからついてきなさい、と言われ、何の予想もなくついていった。どこか楽しいところに連れて行ってくれるのだろうかとさえ期待していた。でも、期待は裏切られた。

四月八日、雲ひとつない晴天の日。わたしは施設に預けられた。とうとうお母さんだけじゃなく、親戚にも見捨てられたのだ。

そもそも、わたしが産まれて心の底から喜んでくれた人なんて、誰もいなかったと思う。お父さんが生きてたらそうはなってなかっただろうけど、わたしが産まれる前にお父さんは事故で死んでしまっていた。交通事故、信号を無視した車の、一方的な事故だった。

お父さんが死んで、詳しい理由は知らないけどお母さんはそのあと中絶しようとしたらしい。でも、その頃にはもう、わたしの体はほとんど完成していた。とても中絶できるような状態じゃなく、だからお母さんは、しょうがなくわたしを産んだのだ。

退院してすぐに、お母さんはわたしを親戚のところに預けた。女で一つで育てる気はなかったらしい。そして、わたしは施設に預けられるまでずっと、そこで育てられた。お父さんの事故やお母さんの中絶の話も、その親戚の人から聞いたもので、ほんとのところはよく分からなかった。由奈、というわたしの名前も、その時親戚がつけてくれた名前だ。

親戚の人は、わたしが小学校に入学するまでなら育てる、との約束をお母さんとしていたらしくて、お母さんはそれ以来どこかに行ってしまったと聞いている。

そしてわたしは四月の桜満開の季節、新しい赤色のピカピカ光るランドセルを初めて背負ったのと同時に、施設に預けられてしまった、というわけだ。

まだ幼くて状況が理解できなかったわたしは、施設に預けられた時、涙の一滴も出ず、ただ無性に寂しかった。お父さんのはもちろんのこと、お母さんの記憶も実際全くといっていいほどなくて、わたしにとって親戚のおばさんとおじさんがお母さんとお父さんのようなものだった。だから、親戚に施設に預けられるのは、親に預けられるのと同じようなものだった。でも結局は、悲しみ、そんなものより、今まで暮らしていた人たちとは暮らせない、家も変わる、何もかも変わる、そう思うと、率直にいやだという拒否感だけだった。

施設に預けられてから六年の年月が流れ、わたしは小学六年になった。この六年間、わたしは親戚の家で発見した一枚の写真のおかげでなんとか生きてこれたようなものだった。

その写真は、わたしが知っている中で唯一お母さんとお父さんが二人で写っている写真。とある神社で撮られたものらしい。そしてこの写真は、わたしの『形見』だった。

お父さんはともかくとして、まだ生きているであろう人が写った写真を形見、というのはちょっと変だけど、そんなのは関係なかった。

形見を、わたしは学校に行くときも持ち歩いていた。いつも、ランドセルを開けて正面下にある、名前や住所などが書かれた紙を入れ

るための薄いスペースに入れていた。そうしていたら、登校際にお母さんに偶然会えるような気がしていたし、時折襲ってくる耐え難い寂しさにも、その写真を手にながめていさえすれば、なんとか我慢できていた。

運動会や音楽祭などの帰り道、みんながお父さんやお母さんに手をひかれて帰っていくのを一人で見ていても、わたしにはこの写真がある、だからがんばれる、と自分に言い聞かせてきた。

小学校生活が終わろうとしていた、卒業式前日。わたしはどこかやるせない思いだった。今までもこういうことはあったけど、今回は違った。イライラもしていたし、いつ泣いてもおかしくないような状態だった。

卒業式に、わたしの親は、来ない。授業参観や運動会など、今までならそんなこと当り前だったのに、その日はいつもと全然違っていた。親はいないんだから、施設で育っているんだから、そんなの仕方ないこと。そうやって今まで受け入れてきた現実が、その時初めてかわいそうなものだと思った。

孤独。

惨め。

絶望。

そんな不安は、いつのまにか怒りに変わっていた。わたしをまるで人と思っていないお母さんに対しての怒りと、そんな人の子供が自分だという辛い現実が、わたしを追いつめた。

そしてそれはなんの理由もなく、自然に、あの写真へと向かった。

下校中のことだった。

川の上を通る橋の上で、わたしはランドセルをあけていた。取り出したのは、あの写真。そして写真の、お父さんとお母さんを切り離すみたいに手で乱暴にビリッと破る。お母さんの写っているほうだけ、川に捨てようとしていた。もう何もかもがどうでもよくて、この心の痛みさえ消えてしまえばそれでよかった。

流れの激しい川に落として、海でも湖でもどこでもいいから、どこか遠くに流れていってほしい。水の奥深くに沈み続ければいい。お母さんがかつてわたしを捨てたみたいに、今度はわたしがお母さんを捨ててやる。

なのに、いざ実行しようとしても、うまくできなかった。写真を二つに破るとこまでは別に何ともなかったのに、写真で笑顔いっぱいのお母さんを見ていたら、手がビクビクと震えて、写真を川に放ることができなかった。そんな自分がますます嫌になる。こんな思いをするんだったら、あんな写真発見するんじゃなかった。

結局、わたしはお父さんが写っているほうの写真だけを形見にすることにして、お母さんのほうは机の引き出しに閉まっておくことにした。そうすれば、ある程度は自分の中で、お母さんとお父さんとの区切りをつけられるような気がした。

でも、できなかった。お父さんの写真のほうが手近にあるにもかかわらず、お母さんのことばかり考えてしまう。逆に引き出しにしまわないほうがよかったかもしれない。でも、それ以外の方法が思いつかなかった。

お父さんが死んだからじゃない。ただ、ずっと親無しで生きてきたのに、それでもまだ、わたしを捨てたあの人のことが忘れられない。そればかりか考えてしまうなんて。自分が憎くて憎くて、許せなかった。

といったって、あれから三年経って中三になった今も、あの人は今どこにいるのだろう。一体、何をしているのだろう。そんなことを考えてしまうことが、時々、ある。一人でボーッとしているときに、不意にあの人が頭に浮かんできてしまう。

たぶん、わたしが机の引き出しに入っている写真に写る人のことを完璧に忘れる日は、永遠に来ないと思う。いくら拒否したって、それはしょうがないことなんだと思う。心が否定しても、本能が求めている。こういうのは、どうやったってどうにもならないんだ。中学生になって、それくらいのことは冷静に受け入れられるようになった。ただ、受け入れられるようになったぶん、自分の無力さを痛感した部分もあった。

ただ、わたしは、あの人のことを考える時必ず、どこかの道ですれ違っただけの、あくまで他人を意識するようにしている。施設に預けられる日の前日に見た、あの夢のようには見ないようにしている。あの人は、どこにでもいる人――背景と一緒なんだと考えている。あの人のことを、自分を生んだ人としては、決して考えない。あの夢を見た日以来、それだけは続けてきた。

あの日以来、わたしはあの人を、お母さんと認めない事にした。

それには、お母さんを許せないという気持ちもあった。けど、本音はたぶん、自分を守りたかったのだと思う。お母さんを他人、と自分の中で位置づけることによって、自分に足らない何かをごまかそうとしていたんだと思う。これ以上現実に目を向けたくなくて、傷つきたくなかったんだと思う。

第3話　綺麗な月

学校から一キロ弱先に建つ、比較的できて新しいほうの施設。きらきら園という名前で、様々な事情でここに預けられた子供が暮らしている。そして、この施設が、わたしの「家」だ。

きらきら園の内装は、ドラマや映画なんかで見る施設とほとんど変わらない。ある程度の広さのある庭があって、屋内にはたくさんの部屋があって、簡単に言えば大家族用の家、というような造り。

特徴をあげるとすれば、玄関から中に入るとすぐにある、二つの階段がそれだ。左の階段は二人部屋に続く階段で、右の階段は三人部屋に続いている。つまり、二人部屋から三人部屋に行くには、いったん階段を下りて、それからもう一回三人部屋へと続く階段をのぼらないといけない。

これはもう昔からの構造で、今さら立て直そうと提案する人もいないし、財政的にもそんな余裕はない。それに、みんなこの階段の造りになれてしまっている。わたしも最初は違和感があったけど、今となっては特に何も気にせず階段を上り下りしている。

また、どんな子がきらきら園にいるかと言うと、それは様々。まだ一才にもならない赤ちゃんや、もうすぐ高校を卒業する子など、幅広い年の子がいる。名前もつけられないまま、預けられる子もいる。

でも、大学生は一人もいない。理由は、高校を卒業するのと同時に、きらきら園からも卒業しないといけないからだ。

この「ルール」には、何か理由があるのかもしれない。そこまで面

倒を見れないからかもしれないし、早く独り立ちしたほうが将来のためになるという考えからということもあるだろう。いずれにしても、それは分からない。

ただ言えるのは、高校を卒業した子がいくらきらきら園を出ていっても、きらきら園に住む子の人数が減らないのは、いつになっても、あの人みたいな人がいるからだ。わたしを嫌々生んだ挙句育てることもなく親戚に預けるような、無責任な大人がいるからだ。

でも、どうしてだろう。心から憎めない。

わたしみたいな施設で育つ子にとって親という存在は、決して天使なんかじゃなく、むしろ悪魔のような存在なのに。それでも憎めないなんて。

ふと、引き出しを見た。あの人が写っている写真が入ってる、引き出し。普段はカギをかけてあって、簡単には開けられないようにしてある。それは、自分の欲望を抑制するため。あの人に会いたい、なんていう邪魔な感情を消し去るため。

でも、時々我慢できなくなる。引き出しの取っ手、今まで何度ながめたことだろう。思わず、手をそれに伸ばす。でも、途中で冷静になって引っこめた。

わたしは決めたのだ。あの人のことを、求めてはいけない。求めたら、もっと寂しくなる。手に入れられないもの、しかも自分を辛くするだけのものなんて、思い出すだけで心が痛くなるだけ。そんなものいっその事、自分を抑えるかわりに痛みを感じなくなるほうが、ずっと楽でいられる。それに、あの人はわたしを捨てた人だ。そんな人の写真を見たって、何にもならない。

今まで何度か引き出しを開けてしまいそうになったことがあったけど、その時はそんなふうにして、ずっと我慢してきた。

代わりに、机に立てた写真たてに挟まれた、お父さんの写真を見た。

ほんとうに、幸せそうに笑っている。お父さんの実物を見たことも、声を聞いたこともないけれど、きっとお父さんは生きたかっただろう。まさか、自分が事故で死んでしまうなんて、思ってもみなかったに違いない。

お父さんは、果たしてわたしに会いたかっただろうか。自分が死ぬと予感した直前に、わたしがきちんと無事に生まれてくれるように、祈ってくれただろうか。いや、祈らなくてもいい。わたしのことを、思ってくれただろうか。一瞬でも、考えてくれただろうか。

分からない。遠いような近いようなとこにある空の薄高い雲みたいに、届きそうで届かなくて、分からない。もどかしい。一番いてほしい人がそばにいないことも、いてほしくない人を求めてしまう自分も、全部難しくて分からない。

「ねぇ。何考えてるの」

分からなくて虚しい。

分からなくて不安になる。

「ねぇ、ちょっと由奈。聞いてる？」

「え？」

「って、そんな反応あり？　なんか考えてたんだろうけどさ」

香絵に言われて、気づいた。またわたしは、考えなくてもいいことを考えていたんだ。

香絵は回転イスに座って、こっちを不思議そうにながめている。この表情に、嘘をつかずに答えたらどうなるか分かっていたから、

「うん。ちょっと。今日あったこと思い出してただけ」

と、あえて本当のことは言わなかった。

「ふうん、そか」

香絵がきらきら園にやってきたのは、わたしが預けられてから一年後のことだった。香絵と同い年の子はその時少なく、そのうちの一人がわたしということもあり、香絵は一番にわたしと仲良くなった。それ以来同じ部屋で暮らしている。二人部屋と三人部屋じゃやはり違いはあるようで、わたしと香絵はその象徴ともいえる関係だと思う。

「香絵、寝ないの？　もう十二時だよ」

わざとあくびをしながら、わたしは言った。

「そういう由奈も寝ないじゃん」

久しぶりに月を見た気がする。

窓から視界に入る月が、今日は一段と輝いていてきれい。そういえば、あと五日後の夜の天気は晴天で、くっきりとした満月が見れるらしい。わたしはあの丸みが好きだ。あまりにも完璧すぎるほどの丸を見ていると、なんだか楽になる。

「ねぇ、由奈」

「何？」

「由奈ってさ、将来どうしたい？」

香絵の質問がいきなりで、わたしは少し戸惑った。

「どこに住みたいとかどういう仕事したいとか、さ」

正直、わたしはそういうのを全然考えたことがない。別に今さえよければいい、ってことじゃないけど、考えてもその先が続かないのだ。将来のことを考えてると、ひたすら奥深く続くかたい地面を掘っているだけみたいで、何か無意味に思えてしまう。結局は現実逃避なんだけど、どっちにしろ今やりたいこと、やってみたいこと、はこれっぽっちも思いつかない。

「やっぱ、由奈はそういうのって、わかんないタイプ？」

わたしが言葉に詰まっていると、香絵はさらっと言った。

「まぁ、そうかもね。わかんないっていうか、そういうの考えられないっていうか。ちょっとは意識したほうがいいんだろうけど、なんかそれさえもできないんだよ」

「由奈は、今だけで精一杯って感じだからね」

「うん。情けないけどわたしもそう思う」

「自分で分かってるんじゃん」

「分かってても、行動に移せないからしょうがないんだよ」

「それ言えてる」

あまり大声にならないように二人で顔を見合わせて笑い、決して重苦しくない数秒の沈黙が流れた。いや、沈黙じゃない。どちらかといったら、合いの手に近いような空白だった。

「じゃぁ、わたし寝るね」

沈黙の流れに乗るかのように、香絵は言った。

「うん。おやすみ」

「由奈は寝ないの？」

「あと、ちょっとだけ起きてたい気分。先寝て」

「わかった。じゃぁ、おやすみ」

「おやすみ」

香絵がベッドの中に入って寝静まってからも、わたしは一つあくびをしかけたけれど、まだ寝る気分にはならなかった。

今日の月はきれいだから、ずっと見ていたい。夜空に浮かぶ幻想的な月を、首が痛くなっても見ていたい。月からこぼれる微量の光を浴びている間は、全部忘れることができるから。

第４話　付きまとう過去

気がついたら、闇の中にいた。闇といっても、自分の視界ははっきりしていて、でも風景は全部黒色、という感じのところ。目を閉じてても部屋の電気を点けられたら分かってしまうように、意識はきちんとある。だから、完全な深い闇ではなかった。

ただ、心は闇だった。不安で不安でしかたない。自分がそこにいるのは分かっていても、そこにきちんとした足場があるのかは分からないし、まず自分のいるべき場所がここなのか、それさえ不確かで、だからすごく不安になる。

「由奈」

そのとき、誰かに呼ばれた。

やっと助けに来てくれた、と思い期待して振り向いたら、そこにはあの人がいた。いや、いるのだけど姿は見えない。まるでこの闇の風景自体があの人を表しているみたいに感じて、余計に怖くなった。写真でしか見たことない人。わたしを産んで、捨てた人。この世で一番許せなくて、一番嫌いになれない人。その人が、今、わたしを取り囲んでいる。

「あんた、なんで生まれてきたわけ？」

闇の中から声がする。

「やめてっ！」

これ以上わたしの人生に付きまとわないでほしい。付きまとってくるのなら、どうせわたしを捨てるなら、親子という関係も一緒に捨ててほしかった。完全に断ち切ってもらえないと、わたしは考えてしまう。嫌でも思い出してしまう。もう、こんな思いするなら、生まれてこなきゃよかった。

その時、わたしの足元に大きな穴が開いて、落ちそうになった。足から一気に穴の中に吸い込まれそうになる。ここに落ちたら、もう二度と戻ってこれない。

「助けて！」

必死に声を出してそう求めるけれど、姿のない冷たい声はこう言った。

「あんたなんて、いなくていいのよ、元々」

思いっきり泣き叫んだけど、喉がつぶれたみたいに声が出ない。わたしは、一生続く闇の中へと落ちていった。

「由奈、由奈っ」

強い力で肩をゆすられて目を覚ましたら、ぼやけた顔がそこにはあった。しばらく呆然としているとそれが香絵の顔だと分かった。少し首を左に傾けると、まだ夜空にはあの輝かしい月があった。

あぁ、またあんな夢見ちゃったんだ、と思った。安心感よりも、そ

んな気持ちが先に出てしまった。
「香絵・・・・・・・？」
「由奈、大丈夫？」
「うん・・・・・・・」
ひどく重くてだるい体を起こしながら、うなずいた。
「すごいうなされてたよ、さっきまで」
「うん・・・・・・・」
「大丈夫？」
「うん、ちょっとまだくらくらするけど」
「なんか、『やめて』とかってすごい大声で叫んでたよ」
「思ったよりきつかったから」
「また、いつものひどい夢見ちゃったの・・・・・・？」
「ひどいっていうか、まぁそうなんだけど。でももう慣れちゃったから、平気」
「そういうのは慣れちゃいけないよ」
「でもしょうがないじゃんっ！　見ちゃうんだから」

思わず、感情的になってしまった。こんな夢を週に一度は見てしまう自分がものすごく嫌だ。運命を憎んでるわけじゃないしあの人を恨んでいるわけでもない。ただ、自分の人生なのにそれを人にぶつけてしまったわたしは、すごく最低な人間だから、それがたまらなく悔しかった。

香絵は戸惑うような顔をして、わたしを見る。普段わたしがそこまで怒ったり大声になったり、ということがないから、特別そうなのかもしれない。でも、香絵の目の奥から伝わってくる言葉にできない感情は、直接胸に響いた。

「見ちゃうんだから、しょうがないでしょ。自分の意思じゃどうにもならないことって、あるでしょ。わたしは、それが多いだけだから・・・・・心配ないから・・・・・」

正直にごめんと言えなくて、結局言い訳みたいな謝り方になってしまった。

「とりあえず、その夢のことは思い出さないほうがいいよ。何も考えないで寝ころんでたら、またすぐに眠れるだろうし。すぐには無理だろうけど。明日も早いし」

「うん・・・・・ありがと」

「ううん。ここで暮らすんだから、それくらい自分出さないと、やっていけないよ」

「そうだよね、ほんとありがとね」

最近、無性に苛立つことが多い。

思春期は精神的に不安定、とよく言われる。グラグラ地震のように揺れるんじゃなくて、シーソーのバランスが保たれずにいるような状態がそれだ。わたしの場合、シーソーが傾く方向は決まっているけれど、傾き具合がその時々によって変わってしまう。少しの差で嬉しくなったり、悲しくなったりイライラする。でもその根底にあるのは、自己嫌悪、という感情だ。

「じゃぁ、電気消すよ」

そんな中、香絵の優しい言葉には安心する。

香絵がいることで、どうにかわたしは「わたし」でいられる。

「おやすみ」

「おやすみ」

豆電球だけ点いた部屋は、やっぱり落ち着いた。あれだけ小さな明かりがあるだけでも全然違った。出口のない洞窟でも、岩と岩の間から光がもれているだけで外に出れる気がするように、わたしの心に住む深い闇にも、いつかそういう日がくればいいと思った。そんな日なんて来るはずのないこと、ほんとは分かっていた。それでも、期待してしまう自分がいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0774e/

傷跡

2010年12月13日18時08分発行